

地域コミュニティ形成における多世代交流の意義と大学の役割

須賀 由紀子

現代生活学科 地域・生活文化研究室

The Meaning of Multi-Generation Interchange in Local Communities and the Role of Universities

Yukiko SUGA

Department of Studies on Lifestyle Management, Jissen Women's university

The aim of this paper was to assess how to make community places appropriate for the coming super-aged society. The author first examined the concept of a “third place” at which all generations in a local area can share in meaningful conversation. The author then focused on how to find motivation in life for elderly people in multi-generational community settings, particularly with younger people. There were three points in creating such viable community places; wisdom in daily life, activities that motivate elderly people to make a life worth living, and the reading of classics and classical art by several generations. The conclusion was that it was most important that such “third places” have qualified younger people involved in vivid activities with elderly people. Therefore, universities in local areas have the responsibility to educate their students in preparing to meet the challenges of a super-aged society.

Key words : third places (第三の場), the worth living (生きがい), multi-generation (多世代), local community (地域コミュニティ), the aged society (高齢社会)

1. はじめに

少子高齢化が進み、高齢者の人口に占める割合が増える中で、地域コミュニティをいかに形成していくかは、重要な社会課題の一つである。まちを思う人がカフェやイベントを始める、アーティストがまちづくりに活躍するなど、様々な地域活性化が試みられているが、特別な人やしかけによるのではなく、地域コミュニティがごく普通に暮らしの中に生きている状態をいかにつくるか。本稿の問題意識の原点はそこにある。

一つ注目したいデータがある。平成 28 年度版の『高齢社会白書』（内閣府）によると、現在の高齢者は、「趣味のサークル」（18.4%）や「健康・スポーツのサークル」（18.3%）に参加したり、「老人クラブ」に所属（11.0%）したりして、居場所を得ている。そうした「所属先」の中で、現在、最も参加率が高いのは「自治会・町会」（26.7%）である。しかし、実際の活動の参加度でみると、「高齢期に行いたい活動」の上位に、「サークル活動・仲間と行う趣味・

教養」（43.6%）、「スポーツ・レクリエーション活動」（35.0%）、「習い事」（32.4%）などがランクされるのに対して、「町内会、自治会活動」はその下位の 17.1%となっている。つまり、自治会・町会に加入はしているが、活動への参加は別であり、自治会・町会にはやむなく入っている、という状況がうかがえる。一方、「老人クラブ」への新たな参加希望率は 7.6%と低迷しているが、「若い人との交流」には約 6 割の人が参加したいと希望している。「若い世代との交流機会の設定」を望む声は約 3 割あり、とりわけ男性は、青年・壮年層との交流を求めている。

このようなデータを鑑みるに、自治会・町会の活動に若い人たちが関わり、多世代交流を促進して、魅力ある地域コミュニティを創りだしていくことが、これからの自立した地域づくりに必要な一つの施策と考えられる。若い世代が、地域の自治会や町会の活動に早い段階から理解を持てば、そのまま子育て世代になっても、地域への愛着を持ち、地域コミュニティの存続

に利することであろう。大学生の地域活動を、そのような意識を持つ機会として活性化していくことは、大切なことではなかろうか。そのためには、自立した地域づくりにおける学生の地域活動の意義や可能性についての考え方を理念として持つことが必要である。

以上の問題意識を背景に、本稿では、地域コミュニティ形成の場のあり方と、若者（学生）がそこに関する意義についての知見を得ることを目的に論考をすすめる。まず、地域における「拠り所となる居場所」について、「サードプレイス」の概念から検討する。次に、来る高齢社会にどのようなサードプレイスのデザインが望まれるのか、高齢者の〈老いがいい〉という概念に着目して考える。その上で、地域社会の中にサードプレイスを創り出す多世代交流のあり方を考察し、そこへの学生のかかわり方、及び学生を地域活動につなぐ大学の役割について論じる。

2. サードプレイスという場の可能性

「サードプレイス」とは、生活の場である「家」（第一の場）でも、生計を立てる場である「職場」（第二の場）でもない、「第三の場」をさす。

この言葉を提起したのは、アメリカの社会学者のオルデンバークである。都市化、産業化、情報化が進み、職場と家の往復で、居住地に戻れば「我が家」に閉じこもってしまう都市近郊のライフスタイルの中で、「とびきり居心地のよい場所（Great Good Place）」と思える「第三の場」を持つことの大切さを提唱した。オルデンバークがこの問題を初めて公に発表したのは、1977年のことである。書物としての初版は1989年、サードプレイスの特徴や役割、存在意義について、多くの事例を用いて論じることができるほどに、概念が成熟した段階であった（オルデンバーク 2013：6）。

オルデンバークが提唱する「とびきり居心地のよい場所」は、「インフォーマルな公共生活の中核的環境」であり、それは、カフェのような場所である。そのサードプレイスの特徴は、以下のようにまとめられる。①地域密着のインフォーマルな公共の集いの場である ②あらゆる人を平等に受け入れることができる、とくに、③「新参者（いわゆる新住民）」の人にも入りやすい、④パブリック・キャラクターと呼ぶ人々を創出する（近所のあらゆる人を知っていて、近

所のことを気にかけているような人物）、⑤あらゆる世代を包み込む。若者と大人と一緒にくつろがせ、おしゃべりが大好きな老人にとっては格好の居場所となる ⑥誰ももてなし役を要求されることもなく、無理やり付き合わされるということもない。そこが心地よいのは、遊び心に満ちて、無理なく自分の個性が発揮できて、「楽しいから」の一言に尽きる。⑦こうした場が日常生活の中にあれば、人柄を理解しあった上での信頼感ある「顔見知り」ができ、自然な助け合いを生む。⑧その場所は、概して簡素な外観であり、気軽に歩いていけるところにある。

つまり、サードプレイスは、精神的な心地よさを与える「もう一つの家」のような場であり、そこは「楽しさ」に満ちている。ただし、その「楽しさ」は、表面的なその場限りのものではない。その点の理解が、サードプレイスの価値の理解には重要である。その特別な楽しさを創り出す要素は、「目新しさ・珍しさ（Novelty）」「人生観（Perspective：見通し、眺め、バランスの取れた視点）」「心の強壮剤（Spiritual Tonic）」「友達集団（Friends by the Set）」の4つである（同上：98-130）。

第一の「目新しさ・珍しさ」、これをオルデンバークは、「原始的生活の中にもあったもの」にたとえている。野生に対峙する原始的な暮らしは、「今日をいかに生きるか」という真剣勝負の中で、人間の多様な能力が最大限に活用され、「退屈」とは無縁の創造的な暮らしであったと考えられる。翻って現代の労働環境や日常生活は、狩猟採集民のそれとは対照的で、安全だが漫然としていて、倦怠感や味気無さに満ちている。そういう日々の中で、サードプレイスに行けば、新たな発見がある。ごく日常的なことも、テレビやインターネットなどによる「誰かの情報」ではなく、生身の対面の空間の中で交わされる会話から得られる。そこには、その場の関わりの中でしか得られない本物の情報がある。

なぜ、そのような恩恵にあずかれるか。それは、a) 多種多様な人の集まりであること b) 計画性や組織の欠如、まとまりの緩やかさ、顔ぶれの流動性があること。それゆえに話の種も変化に富んで、思いがけない展開を生む。c) 主義主張や思想にとらわれないことがない。論理一貫性に欠けるとしても、そこに集う人の個性や人柄ゆえに、人間がより好きになり、いつ

でも愉快になれる、という点が挙げられる。

しかしながら、これだけでは、その場限りの、表面的な楽しさに過ぎないようにもみえる。では、その場限りの楽しい関わりとはどう違うのだろうか。

それについては、次の第二の点が重要である。

すなわち、第二に、邦訳では「人生観」と訳されているが、人生の見通し、考え方のようなものを得ることができるという特徴である。変化激しく、たくさんの情報が流れてくる社会の中で、確かな人生の見通しをなかなか持つことができないのが現実だが、サードプレイスでは、幅広い層の人たちの経験に裏打ちされた知恵がユーモアで語られて、その集合知から、健全な人生観を得ることができるのである。

第三に、この場にいることは「心の強壮剤」となる。それは、「自分が語りたい」とことと、「それが人を幸せな気分にする」ということが、完璧に融合されているからである。そうした居心地感を生むのはなぜか。それは、場を共有する人の「なんでも受け入れるおおらかな心的態度」による。参加者同士の関わりが、「生活者」としての関わりであるということにそのポイントがある。誰もが生活者であることに優劣はない。それぞれの生き方・あり方を模索した人生は、それぞれに価値がある。それを語るとき、肩書とは無縁、社会的役割とは無縁の「生活者としてよく生きる」という感覚に基づく「表現の自由」が生まれ、その場の会話の楽しさを生んでいく。そのような中では、大多数の人々が下品にならない。

第四に、そこで出会う人は、「たまたま友人になる」という関係であり、個人の偏狭な好みにとらわれない友である。相手に合わせて待つ必要もなければ、会う約束をする必要もない。この場で、「生活」への思いに満ちた良識ある人々との横のつながりが広がっていき、個人の財産となっていく。

以上が、サードプレイスの特徴の要点である。こうした場が地域の中にたくさん点在していけば、「信頼に基づく人と人のつながり（＝社会関係資本）」が生まれ、住みやすいまちへとつながることであろう。

オルデンパークの描いたサードプレイスは理想的すぎるのではないかというコメントもあるが、彼は、多くの「現場」の観察を踏まえてのことであり、決して大げさでも言い過ぎでもないと主張する（同上：158）。もしそうであるならば、地域におけるサードプ

レイスの存在は、少子高齢化がすすむ現代の地域社会の社会関係資本を作るうえで、非常に重要である。色々な場所の様々なサードプレイスをつなげば、面として住みやすいまちになっていく¹⁾。実際に、まちのカフェやコワーキングプレイス、図書館やスポーツ施設など、様々な場所がサードプレイスとなりうるが、身近な居住地にある公民館や地区センターのような場所が、自治会・町会活動を通じて地域の多世代が気軽に楽しく交わるサードプレイスとなることは、最も身近な居住空間に助け合いのコミュニティを生み、自治会・町会を生きた社会関係資本としていく大きな可能性を孕む。

「サードプレイスの個性は、常連客によって決まり、遊び心に満ちた雰囲気の特徴とする」（同上：97）とされるように、このような場を生む源となるのは「人」である。従って、多種多様な人々を受け止め、多世代の人が自然に集まるような場をどう作り出していくのが大事である。とくに、急ぎ足ですすむ高齢社会の受け皿と考えると、高齢者にとって望まれる場のデザインから発想し、そこに多世代交流をどう重ねていくかを考えることが重要ではないか。そこで、次にこの点について考察をすすめる²⁾。

3. 〈老いがい〉という捉え方で老年を見る

3-1. アクティブ・エイジングの時代

老人福祉法では、「高齢者が生きがいを持てる健全で安らかな生活」の保障が理念にうたわれ、高齢社会対策基本法でも、「国民一人一人が生涯にわたって安心して過ごすことができる社会」が目指されている。高齢者の生きがいは、もちろん個人のウェル・ビーイングとして大切であるが、同時に、医療・介護の公的支出の節約という政策課題とも結びつき、高齢者の「生きがい」は声高に叫ばれる結果となっている。

実際に、日本の高齢者の姿はどうであろう。いくつかのデータを参照してみると、平成27年度版の『高齢社会白書』は、日本の7割の高齢者は生きがいを感じており、「毎日の生活を充実させて楽しむことに力を入れたい」と考えていることを報告している（内閣府2015）。「毎日の生活の充実をもたらすもの」について、「国民生活に関する世論調査」では、60歳以上の日頃の生活の中で充実感を感じる時を調査して、男性は「趣味やスポーツに熱中している時」

(43.9%)、女性は「友人や知人と会合、雑談している時」(52.6%)が最も多く、男女共に「家族団らんの時」(男性 37.9%、女性 42.6%)と続いていることを示している(内閣府 2015)。家族や友人に囲まれての人的つながりは生きがいを感じるうえで大切な要素であるが、あわせて、趣味やスポーツなど、自分らしさが活かせる活動を持っていることが、高齢者にとっての生きがいある暮らしの大切な要素であることが読み解ける。また、内閣府が平成 25 (2013) 年に全国の 60 歳以上男女に実施した「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」においても、生きがい(喜びや楽しみ)を感じている(「十分感じている」+「多少感じている」とする割合は、全体の 79.2%であり、生きがいの源として「家族団らんの時」(48.8%)「友人知人との時間」(44.7%)とならんで「趣味やスポーツに熱中している時」(44.7%)がトップ3となっている。

このようなデータから、好きな活動への参加や、豊かな社会関係、家族といった存在が、老年期の生きる張り合い、生きがい感には欠かせないと言えよう。そして、7 割を超える高齢者が「個人または友人と、あるいはグループや団体で自主的に行われている活動を行いたい、または参加したい」と答えており(72.5%。内閣府 2009)、希望活動内容としては「健康・スポーツ」(44.7%)「趣味」(26.3%)「地域行事」(19.1%)などが上位に挙がっている。現在の高齢者層は、社会活動・社会参加への意欲を高くもち、自主的に主体的に自らの暮らしを作りだすアクティブ・エイジングをめざす人々の増加がうかがえる。先の高齢者基本法の文言にみるように、社会全体も、アクティブ・エイジングをよしとして、そのためにも、高齢者の社会活動・社会参加が促されていく。

このように、データでみれば、たしかに趣味であれ就労であれ、社会に出て何か「活動」をし、豊かな社会関係を結ぶことが高齢者の生きがいある人生につながるが客観的数字として表れる。しかしながら、それは、都市化・産業化・情報化の進展の中で、社会における地位や役割が不明確になりがちな高齢者が、人に迷惑をかけないよう、「充実した生のために地域活動や生涯学習をして何とか生きがいを持たなければならない」という、一種強迫的とさえいえるような現象、とみることもできるのではないかな。そういう問題

意識を指摘する一人、片岡らの研究(2014)では、中山間地域住民の生きがいについて調査した結果(吹野・片岡 2006)、「活動」ではなく、「家族」や「健康」に生きがいに関連づけられて語られる傾向が強いことを明らかにしている。つまり、活動することではなく、「存在そのもの」が受容されるような在り方、「あるがままの自分が他者(家族)から愛され受け入れられ、そして、またそれらの他者とともにいられることに、生きているねうちを見出す」という高齢者像がそこにはある(片岡・吹野 2014: 42)。声高に「社会参画」を叫ぶのではなく、存在の豊かさの価値を静かに感じられるような社会づくりに目を向ける視点を示している。

アクティブ・エイジング(活力ある高齢化)という概念は、世界保健機構(WHO)が 1990 年後半から提唱したものであり、高齢者自身の自立の維持、そしてそれを可能にする自主的・自発的な社会活動・社会参加の実現は、グローバルスタンダードとして目指されている(WHO2007)。しかし、「何かをする」という活動にばかり目を向けるのではなく、「この世界で生きていること自体を証してくれることがらに生きがいを見出そうとする傾向」(片岡ら: 49-50)をもっと捉えていく必要があるのではないかな。そこには、若い頃にはなかった、老いてこそ見えてくる「老いの価値」がある。活動的な元気老人はもちろん長寿時代に望まれるが、一方で、「存在」そのものに価値を見出せるような老いのあり方とは何か、そこに目を向けて、そこに共感し、それを享受できるような社会づくりを求めていくことが、豊かな長寿社会づくりにおいて必要なのではないだろうか。

そこで、次に着目したいのが〈老いがい〉という言葉である。

3-2. 〈老いがい〉について

「近代の老い」の問題に、深く関心を寄せた天野正子は〈老いがい〉という捉え方を提唱した。社会学者の天野は、生活者の現場に入ってフィールドワークを行い、生活の「生」の声を聞き、それを丁寧に紐解く中に人間と社会を見つめ、思索の言葉を紡ぐという姿勢を貫いた。そうした研究は、当然、時代の空気を受け、ジェンダー論や女性労働の問題、ネットワーク論など、新しい社会を読み解く視野を切り拓いていった

が、自らの加齢とともに対象となったのが、老いの問題であった。それは、急速な都市化、産業化の中で、老いた者が居場所を失い、予測しない老いの姿が現れていくことに立ち往生しつつ、新しい時代の「長寿」社会をどう描くべきか、日本社会が立ち向かわざるを得ない問いであった。

『生きがい』より〈老いがいい〉の方が、『生』のよりふさわしい表現ではないか。長寿社会を生きる新たな高齢者の姿を、天野は〈老いがいい〉というキーワードのもとに描き出す(天野 2014 : i)。

〈老いがいい〉とは、「個人の人生の時間軸をこえて、先祖と子孫を結ぶ、より長い生命の連鎖を見据える老人ならではの視点」で、「自分が新しい先祖になる」という思いで、自らのいのちを次の世代につなぐことに意義を感じ取ることができるような境地が、その例である(同上 : iii)。言葉を換えていえば「老年になって人が得るもの」であり、「それまで知り得なかった新しい人生の見方」である。それがわかると、「老いることへの向き合い方、意味づけ方」が変わる(同上 : 200)。

人によって多様な老いの姿、老いの感じ方がある。ステレオタイプ化した〈元気老人〉ではなく、多様な老いの姿の中に、人間の多様性の価値を見つめ、多様な老いの姿を、価値あるものとして認め合える社会に、高齢社会先進国・日本は向かいたい。そのためには、老いの価値を理解する必要がある。

では、〈老いがいい〉とは、どのようなものか。

一つは、「神話的な(無文字社会)時間・空間の感覚の中に遊ぶことができる」ということである。その時間は、子どもとの親和性が高い。〈老人—子ども〉の組み合わせは、日本ではともに神祕領域に近い存在として、伝統的に大事にされてきた(宮田 1996)。また、深層心理学者の河合隼雄も、人間は「目に見えないもの」の世界に遊ぶことが心の平穏には必要で、老人—子どもの関係は、そうした人間の時間の価値に気づかせてくれることを述べている(河合 2009)。

子どもにも老人にもたっぷりあるのが「相手の話に耳を傾けることのできる時間」「自然や宇宙の不思議に心寄せることのできる時間」である。「子どもと老人」という組み合わせは普遍的安定感を持つ組み合わせであり、そこで共有される「時間」の中に、近代社会が失ってきた大切なものがある。それは、この世の

「真面目」とは違う、無目的な「もう一つの時間」の神話的時間である。社会や自然の摂理を感じ取り、目に見えないものの中に遊び、人間らしい心を豊かにする大切な時間である。また、地球環境に配慮する心の土台をつくるセンス・オブ・ワンダーを育むことにもなる(R. カーソン 1996)。直接のつながりを持つ孫でなくても、近所の子どもたちでもよい。「もう一つの時間」をともに生きる幼年期の子どもの関わりの中には、〈老いがいい〉を感じさせる時間がある。

二つめに、老いの中で深められるのが〈「今」を生きることの価値〉ということである。若い時には、時間は永遠であるかのように映る。しかしながら、加齢し、身体の不具合など感じるにつれ、自らの有限性ということを意識する。「今場所の相撲が見られてよかった」「また次の年の桜も見たいね」という感じ方の日々の中で、粹組みある有限の「今」を生きる。「今を精一杯生きる」という姿は、「時間を『費やす』」のでも、『活用』するのでもなく、時間そのものを生きている(天野 2006 : 118)。そうして「今」という時の接し方が若い頃とは違ってくるにつれ、今まで見えてこなかったものが視界に入ってくる。また、様々な喪失感、老年の心を、「よりやわらかに、こまやかに、ひろやかに変える」(神谷 2004 : 184)ことも可能である。「枯れていく」時間が、「今」という時を深みある時間へと変質をさせていく。どのような生き方であれ、老いの日々の「精一杯」の中にあるのは、真に生きることに向かう姿である。

ここに、〈老人—青年〉という組み合わせがあるときに、老いの今を生きる姿は次世代を担う者の中に感受されて、彼の人生観の礎をつくる。そうした関わりができれば、〈老いがいい〉を感じる時間となる。

このことについて、天野は小川洋子の小説『博士の愛した数式』を取り上げて、説明している(天野 2014 : 115)。登場人物の〈先生〉は、事故のため80分間しか記憶が持たない。「今」の中に生きる〈先生〉に惹かれて、少年の〈僕〉は先生と過ごす「今」という時間に大事にする。それが、少年の人生の仕事も決めていくことになる。〈先生〉の時間は、「今」目の前の出来事の中にあるが、それは思い出としては残らず、80分たつと、きっちりと消しゴムで消されていく。そして、いつも戻るのは、かつての数学者としての若き日の〈先生〉。人生の仕事の中にある真摯な生

き方と、今という時間の価値と、両方が巧みに絡まり合って、「大切なものに向かって誠実に大切に生きよ」というメッセージを、〈僕〉は受けとめていく。「今」の積み重ねの中にしか、人の「生」はない。自分の人生のこれからを考える時期にある青少年と老人という関わりには、幼年期の関わりとはまた違った価値がある。

三つ目に、「隠居」の中にある創造の価値である。隠居とは、「物理的時間よりも心理的時間によって、つまり、自分の内なる年齢の叫び声に応じて、その時が来たと判断されたときに自分で決めて一線から引く」（天野 2006 : 69）ものであり、その「もう一つの人生」の中で新しい創造の可能性を楽しむ。たとえば、55 歳で身を引いて、それから本当にやりたかった地図製作に取り組んで歴史上大きな成果を残した伊能忠敬などがその例である（天野 2006 : 70）、このような「社会的意義ある仕事」でなくとも、「働かねば」「育てなければ」という壮年期をくぐり抜けて、自由になったときに、自我の成長を自ら引き出す「自己改革」をしていく可能性が拓かれている³⁾。「仕事」に忙殺されてきた人々、子育てに夢中で自らの時間の余裕などなかったという人々も、いずれは、それらから手が離れ、自分の時間に余裕を持って接することができるステージを迎える。その時に、「本当に自分らしい生き方」に向かえるかどうか。その時に必要なのは「本当にやりたいこと」を持っている自分と「若い世代との交流」ではないか。若い人との関わりがあると、いろいろな刺激や新鮮なアイデアを受けて、可塑的で柔軟な心をより強く保つことができる。それは新たな創造に大切な契機となる。そして両世代の関わりの中で、若者もまた、人生のライフコース全体を見渡し、これからの生き方の中に複眼的な豊かさを得ていくことができるのである（天野 2006 : 77）。若い世代との交流の中に、老いてこそわかる境地を深めていくことは、まさに〈老いがいい〉といってよい。

第四に、「真面目」を一步離れた自由な身になった高齢者は、「横」のつながりもつながりやすい。生活の中で、それまでがまんしてきたこと、耐えてきたことなど、あけすけに話すことが、特に女性は容易にできる。お互いに名前を知らなくとも、そこに集まった人でおしゃべりに花がさく。これも、一つの「老いてこそ」の〈老いがいい〉の境地といえよう。

第五に、「昨日できたこと」が「できなくなっていくこと」に気づいたときに、その欠損を埋めるためにいろいろと新しいルールを作ったり、新しいやり方を工夫したりするというのも、老いの中にあってこそその〈創造〉である。老いてこそわかるようになる状態に対して、どう助け合い乗り越えるか。これもまた、自我の成長を助けるものといえよう。そのときに、新たな知恵や方法を自らのうちに引き出してくれるのが、他者の存在である。夫婦であったり、ご近所の方であったり、子どもであったり、公的支援の職員であったり、様々であろう。他者との関わりの中で、老年になってこそ様々な能力が引き出され、老いならではの新たな生活の習慣を作っていくのである。

このように〈老いがいい〉は、老いのステージならではの「生」の価値の認識に由来し、その姿は千差万別であり、多様な姿をとる。この〈老いがいい〉を感じる暮らしには、二つの条件があるように思われる。

一つは、「多様な他者」の存在である。新しいものにひたすら向かう、伸びゆくエネルギーに満ちている幼年の子どもとの関わり、現代の平穏な生活の中で十分に満たされていて平和を謳歌しつつも、どこか真面目な倫理観を持つ現代の若者、また、気さくに話せる同世代の知人など、多世代のコミュニティを有することが、〈老いがいい〉の充実には必要と考えられる。産業化以前の暮らしの中には、これが内在されており、しかもそれほどの長期の老年期がなかったゆえに問題とはならなかったが、それがくずれた現在、生活の中にそうした「受け皿」をいかにつくるかが、やはり課題である。ここに述べた〈老いがいい〉の視点は、地域におけるそうした場の作り方への示唆となる。

もう一つは、自らの生の意味を深める視点を持っているということがある。たとえば、「今」を生きているという時間の中で、花の美しさに心とめたときに、その心を、過去に生きた賢人の言葉、優れた文芸・芸術の表現と重ね合わせることができれば、自らの生の意味を、幅広い時間・空間軸の上に載せることができる。そして、それは、自然観、宇宙観の広がり、自らの生を包み込んでいく。〈多様な他者との関わり〉の中で、それを享受できる場が身近にあれば、〈老いがいい〉を深めることができるのではないだろうか。

「自立した老い」とは、「なんでも自分でできて人に迷惑をかけることがない」と思われがちだが、それよ

りも、生の価値を意味づけていくネットワークを持ち、他者との関わりの中で〈老いならではの創造性〉を発揮して、次世代に精神的な豊かさを手渡し、いのちの循環を感じ取っていけるかということにある、と天野は指摘する（天野 2014：200）。そうしたあり方を、個人のレベルにとどめおくのではなく、社会全体がそういう価値観に基づく社会へと向かう時、本当の意味での安心した高齢社会となることであろう。今は、その過渡期である。過渡期の中で、地域社会の中に、いかにそうした関わり合いの場を作っていくかが、模索されている。

3-3. 「老熟」という文化

〈老いがい〉というものを考えるとき、民俗学の蓄積は、過去の暮らしに学ぶべき視点を教えてくれる。そこには、日本の民衆が本来もっていた老人へのまなざし、「生物としての“老い”」ではなく、文化としてとらえた“老い”（宮田他 2000：4）がある。

それは、①長老制や隠居制がもたらした老人の権威、②長寿を祝う年祝いの豊富な儀礼からうかがうことのできる老人を尊重する観念、③神話や昔話などの口承文芸の中で語られている老人の知恵など、積極的な意味合いが多いという（同上：4）。

宮田によれば、「老い」には、「追加する」（＝付加価値がある）の意味があった。江戸時代には、「老入れ」という言葉があり、それは、新たな文化を創造する可能性を秘めている世代に入ることを祝福する言葉であった（宮田 2007：77）。

基本的に、日本社会では老人は権威ある存在で、祭りの司祭者役を務めるのも、焼畑の火入れをつかさどるのも老人であり、老人は知恵者として扱われ、神々との交感が可能な権威ある存在とされた。神界に近い領域に位置する老人は、「7歳までは神のうち」とされて神域に近かった幼年の子どもとの親和性が高く、事実、生活の知恵や生き物の知恵、自然への畏怖畏敬の念を、幼年の心に刻み、自然界に対峙する人間としてのふるまい方を伝え、その土地ならではの生活文化を伝承したのも、老人の存在であった。こうして、老人は、生活の中で、意識せずともおのずと「再生」と「文化伝承」の役割を果たし、地域社会に居場所があった。「老人の意志は、先祖の観念を、一族の広範囲に及ぼす」（同上：213）ものであった。

このように社会の中で価値ある老人のありようは「老熟」という言葉にふさわしい（宮田ら：2000）。「老熟」には、「知恵、経験、優れた勘を働かす力」という意味と、「熟したものは、やがて木から落ちて、新しい芽を出して再生する」という意味と、二つの老いたものの意味合いが含まれている（同上：21）。このような伝統の「老熟力」は、都市化・産業化・情報化の中ですっかり見えなくなってしまったが、それは、長い日本人の暮らしの中の、戦後からこれまでの、ほんのわずかの時代の中だけの話である。これから的高齢社会とは、かつての伝統社会の中にあった「老人—成人（親世代）—青年—子ども」をつなぐ社会の「再生」（ルネッサンス）といえるのではないか。老熟の価値をいかに活かすか、そこに多世代交流のポイントはある。

4. 地域の多世代交流推進への視点

ここまで、サードプレイスの理念及び老いの価値について、文献に基づき捉えてきた。以上得られた知見を踏まえて、これからの高齢社会において、地域の中にサードプレイスとなる場を創り出す多世代交流には、どのようなあり方が考えられるだろうか。とくに若者との関わりからの観点から考察する。

1) 多世代交流プログラムのあり方

①生活知・経験知・伝承知という要素

オルデンパークの示した交流型サードプレイスの根幹をなすのは、誰もが肩肘をはらずに気軽に参加できる楽しい会話の中の生活知の交流であった。従って、まずは、多世代交流のおしゃべりができる場が地域の中に必要である。それは、やはりコミュニティカフェのスタイルであろう。気軽に安価でお茶が飲めれば、馴染みの人も初めての人もおしゃべりができる。相互依存のネットワークのきっかけは、そういう場を持つだけでもできる。地域の人の居場所には、まずそういう場の創出が望まれる。

誰もがいつでも入れることがサードプレイスの条件であったように、新しい人も参加するきっかけがつかめるよう、時折、非常設型の小さなイベントもカフェに盛り込む。生活の知恵や地域の良さの発見につながる生活文化交流のプログラムは、気軽な異世代交流を生む。コミュニティカフェにおける生活知・経験知の

交流は、「老人—大人(親世代)—青年—子ども」が、年齢や役割を越えて仲良くなれる。

こういう場所は若者にとっても大切である。とりわけ現代の若者は、身近に老人の暮らしを感じる機会がないために、高齢者に対してのイメージを持ちにくい。一方で、高齢社会の到来は現実であり、何かきっかけさえあれば、高齢者の姿に非常に関心を寄せる(天野 2006: 94)。そして、高齢者の生の姿に接し、生の声を聞くにつれて、その生き方の多様性や知恵の多彩さに触れ、新しい見方を得ていく。戦争体験や高度成長時代を子育てに生きた中で経験したことなどの話は、若者が自分自身の生き方を相対化し、複眼的に眺める目をつくり、人生観を培う機会となる。生活知・経験知の伝授を受けつつ、気軽にお茶が飲めるような場を増やすことは、平凡ではあるが、地域の中にサードプレイスを創りだす基本といえる。

また、絵本や昔話というメディアも、とりわけ子ども・親子との交流の場においては、オーソドックスだが、多世代を自然につなぐ媒体となる。手描き絵本から写真絵本まで、人生最初に出会うアートとして、最高の絵と最高の言葉を届けたいという思いに満ちた絵本を選び取り、世代間が交流する場を若者がプロデュースするというのは、価値ある営みの一つである。「読み聞かせ」スタイルにとらわれずに、言葉と絵をきっかけに、高齢者から子どもまでの四世代の心をつなぐ場の創造をどのようにしていくか、柔軟な発想が求められる。そのためには、絵本・昔話に内在する伝承知の本質的な研究も必要であろう。

②「もう一つの」新たな創造性の場

第3章で、公の「真面目」から隠居して一歩引き、本当の自分を生きたいと思う中に、〈老いがいい〉があることを確認した。そういう高齢者の場をどう作り出すかも大切である。そのときに、若者という存在が身近にすることで、創造性がより引き出される可能性が高い。その際、高齢者が仕事の中で得てきた様々な知恵や知見を、若者に手渡していくのも一つの世代間交流となるが、一方で、若い人が今何を学んでいるのか、どういうことに関心があるのかを交流できるような場づくりも、その意味で、新たな創造性の刺激となる。新しい科学・技術や映画、スポーツや音楽のことなど、若い人からの話題提供から生まれてくる価値共創の場づくりである。

「ものの本質をさぐり、考え、学び、理解するよろこび」「自然界の、かぎりなくゆたかな形や色や音をこまかく味わいとるよろこび」「みずからの命をそそぎ出して新しい形やイメージをつくり出すよろこび」、これらは人間の生命そのもの、人格そのものから湧き出る、全ての人に平等に開かれているよろこびである(神谷 2004: 269)。そうしたよろこびを、若い人とともに享受できる場の創造が求められる。

③個のいのちを、永遠なる価値と結ぶ

個の有限な命を、個を超えた雄大な時間の中に位置づける、あるいは普遍の価値の中に位置づけることができる、〈老いがいい〉を深めることができる。その媒介となるものに、古典書がある。たとえば、古事記や万葉集を紐解き、古代人の声に心届け、古人の生き方の中に、自らを重ねゆくとき、自分の時間はふくよかに豊かになっていく。そういう古典への接し方を、これからの未来をつくる若者とともに読み、語らい深め、文化豊かな暮らしを共創していくような場をもし作っていくことができれば、〈老いがいい〉はさらに増すことであろう。

以上の3つの視点のうち、第一の生活知・経験知・伝承知は、圧倒的に老年者の方に優位な知恵である。第二の新しい創造は、老年になってからこそできる「遊」の中に、若い人の新しい感覚や知識を融合させる面白さの提案であり、若者の方に優位性がある。それに対して、第三の提案は「文芸・芸術の前の平等」といえる。優れた文芸・芸術という価値あるものに対しては、老年も若者もない。経験の中で知っている知識は、かえって邪魔になるかもしれない。若い感覚こそが思いもかけない読み解き方をするかもしれない。文芸・芸術を深めて古人の心に寄り添っていくと、多様な発見がある。そういう場こそが、本当に精神の自由をもたらしてくれる、生涯学習の場といえる。生涯学習へ的高齢者の意欲は高く⁴⁾、その欲求を満たし、奥行きある老年の時間を過ごしていくことで、次世代との共生ができるのである。

以上、3つの型の多世代交流プログラムの中で、第一の生活知・経験知・伝承知では、多世代の広い交流の輪が気軽に生まれる。第二・第三の場では密度濃い深まりの楽しさがある。ここまで示してきたように、いずれの場においても、社会人以前の若者(大学生)世代の存在意義は大きい。自治会・町会がそんな多世

代交流の場づくりの役割を果たし、若者も関係していく。その結果として、いつも新しい出会いがあり、人生観を感じ取れる、心の強壮剤となる場、そしていろいろな人に出会いつながりを得るサードプレイスが、地域の中に生まれていく。本稿冒頭の「はじめに」に示したように、老人クラブへの参加希望率は低迷しているが、若い人との交流には希望割合が多いのであるから、自治会・町会の活動を、次第にこのような多世代交流の場に変えていくことで、地域活動が活性化し、そのプラットフォームとしての公民館や地域の文化施設、地区センターやコミュニティカフェがサードプレイスとなっていくと考えられる。

2) 多世代交流における若者と大学の役割

以上の考察を通じての結論として、こうした場づくりの要となるのは、若者世代、とくに大学生ではないか。大学生は、幼年とは違い、人として生きることの意味を深めていくことのできる世代である。その一方で、「大人」の人生にもまだ踏み込んでいない。そういう立場で、多様な老いの姿の中に人生を感じ、感受性を高めていくことは、高齢者という存在を理解し、よりよい高齢社会を創っていくために必要なことである。また高齢者の側も、若い人との関わりの中で、老熟の力を発揮し、〈老いがい〉を深めていくことができる。多世代交流の場の創出は、多世代を結ぶところに位置する若者に可能性がある。

具体的な活動プログラムにすれば、カフェ活動や読書会など、これまでも社会教育やレクリエーションとして行われてきている活動と変わらないかもしれない。大切なのは、そうした場に、どう意味を付与して、場を創り出すかであり、その積み重ねが、地域の中にサードプレイスを形成していくであろう。その橋渡しの役割は、地域のステークホルダーの一員である大学が担う意義がある。

これまでの成長の時代とは違う精神的豊かさを求める定常化時代の中で（広井 2008）、ローカルな地域の暮らしに対して興味や価値を感じる学生を、大学が所在する自治体の地域活動の中に積極的に参加させ、そこで、地域の高齢者の方々と積極的に関わる機会を持つ。学生が、多世代交流の場の「エクスペリエンス・デザイン」を考え、地域交流プログラムとして提供し、地域の良識ある大人たちと関わる中で、地域の幸

せづくりの経験を積む。こうした営みを大学の教育として行うことは、現代の大切な取り組みといえる。そのことは、これから社会人となっていく学生にとっての企画・制作・広報のオンザジョブ・トレーニングでもある。また地域の生活者の意識を理解し、町会・自治会活動の存在意義にも目を向けていくことがきっかけとなる。このことは、後に夫婦世代となったときの地域活動の礎となる。暮らしの安全・安心を、行政任せにするのではなく、自分が主体となって創りだしていくところに生まれる自立生活・自立社会の構想。その実現に向けて、学生の力を活用して、行政と市民および市民団体など様々なステークホルダーを繋いで地域のサードプレイスを創りだしていこうとする活動は、これからの時代に社会的意義ある地域と大学の連携のあり方となるのではないか。

5. まとめ

本稿は、少子高齢社会に対応した地域づくりを課題として、まず多様な人々が気軽に集うサードプレイスの重要性を再考した。次に、地域社会の中にサードプレイスをどのように作っていくか、高齢社会の喫緊の課題であるという観点から、高齢者の〈老いがい〉という捉え方に着目して考えた。その結果、高齢者の〈老いがい〉にとっても多世代交流が大切であり、その交流の場の創出には、大学生が大きな役割を果たしうることが導かれた。地域活動の主体者はもちろん地域の自治会・町会であるが、そこに大学生が関わることによって、活動の場が地域住民のサードプレイスの場となり、地域コミュニティの要となっていく可能性がある。地域コミュニティにおける社会関係資本形成の観点から、その意義は重要であり、そこに関与する大学の社会的責任は大きいことが結論として示された。

サードプレイスは、「家でも職場でもないもう一つの空間」という意味あいから、一人静かになれるカフェのような場がそれにあたる、という解釈もある（「マイプレイス型サードプレイス」）。大学生にとってのサードプレイスが、こうした一人ぼっちの時間空間を守るためのカフェの中ではなく、地域コミュニティの中にあり、そこで「とびきり居心地のよい場」づくりに参加していく学生生活が、地域の社会関係資本形成の一助となり、新たな地域のつながりを生む。そう

した経験を学生時代にした若者が、次の子育て世代となつて、自立的な地域社会の担い手となつて、高齢社会対応の新しい暮らしを切り拓いていく。そのような社会構想に向けて、地域と大学が連携しての自治会・町会活動推進の現場の実践を積み上げていくことは意義ある営みといえるのではないだろうか。今後は、そのような実践の場の中での課題点を検討していきたい。

注

- 1) コミュニティに多様な居場所（コミュニティカフェやコワーキングプレイス、魅力的な商店街、人々が憩い・活動する公園など）をつくりだし、コミュニティ全体を、そこに暮らす様々な人にとってのくつろぎある「リビング」にしようという「コミュニティリビング」という概念も生まれている。（小泉 2016：はじめに 15）
- 2) すでに人生 100 年時代が想定され、従来の「高齢期」とは違った捉え方をしていくことの必要性も指摘されるが、ここでは、現段階での高齢社会への対応という問題意識から、これまでの高齢者の捉え方をもとに論考をすすめることになる。
- 3) 社会学者の鶴見和子が 1960 年代後半に提唱した考え方。自己改革とは第一に、個人による既成の社会規範の作りかえの価値、第二に、個人の異なる時点における価値、考え方、行動の方の作りかえを意味する。ポスト子育て期の第三期の女性の生き方がまだ問題になっていない時点での最も早い指摘として重要と天野は述べる。（天野 2006：76）
- 4) 高齢者の意識調査をみると、生涯学習をしたいと思うと答える人は 8 割を超えている（内閣府平成 24 年調査）。新しいことに挑戦したり、人間らしい精神活動に対する欲求が高くなることがわかる。

参考文献

- 赤田光男・福田アジオ編（1998）：時間の民俗（講座日本の民俗学 6）、雄山閣出版
- 天野正子（2014）：〈老いがい〉の時代、岩波書店
- 天野正子（2006）：老いへのまなざし、平凡社
- 伊東光晴他編（1986）：老いのパラダイム（老いの発見 2）、岩波書店
- 伊東光晴他編（1987）：老いの思想（老いの発見 3）、岩波書店
- 伊東光晴他編（1987）：老いを生きる場（老いの発見 4）、岩波書店
- 久野和子（2016）：フィンランドにおける「第三の場」（third

places）としての図書館、神戸女子大学文学部紀要 49 巻、101-114

小倉康嗣（2006）：高齢化社会と日本人の生き方、慶応義塾大学出版会

片岡佳美・吹野卓（2014）：「高齢者の生きがい」再考、生きがい研究（20）、37-51

樺山紘一・上野千鶴子編（1993）：21 世紀の高齢者文化、第一法規

神谷美恵子（2004）：生きがいについて、みすず書房

河合隼雄／河合俊雄編（2009）：生と死の接点、岩波書店

小泉秀樹（2016）：コミュニティデザイン学、東京大学出版会

WHO／日本生活協同組合連合医療部会訳（2007）：WHO「アクティブ・エイジング」の提唱、萌文社

広井良典編（2008）：「環境と福祉」の融合、有斐閣

宮田登（1996）：老人と子供の民俗学、白水社

宮田登（2007）：子ども・老人と性、吉川弘文館

宮田登・森健二・網野房子編（2000）：老熟の力、早稲田大学出版部

レイ・オルデンバーグ／忠平美幸訳（2013）：サードプレイス、みすず書房（Ray Oldenburg 1989: The Great Good Place, Paragon House,）

レイチェル・カーソン／上遠恵子訳（1996）：センス・オブ・ワンダー、新潮社

内閣府：高齢社会白書（平成 28 年度）<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/index.html>

内閣府：高齢社会白書（平成 27 年度）
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/zenbun/index.html>